

平成 30 年度調査研究報告書

知的障害者の自立に書籍を活用する一考察

長野大学 社会福祉学部

伊藤ゼミナール

F16148 矢島陸帆

指導：伊藤英一教授

目次

1. はじめに 1 ~ 2 P
2. 実験の概要 2 ~ 3 P
3. 目的 3 P
4. 調査方法 4 ~ 5 P
5. 考察・課題 6 P
6. 参考文献 7 P
7. 謝辞 7 P

1. はじめに

本研究は、「本」つまり書籍を知的障害者の日常生活に役立てるための研究である。私は書籍が好きであり、私はこれまでに、石田衣良さんや恩田陸さん、有川浩さん等の書籍を多く読んできた。そして書籍は私にとって、困難に直面した時にヒントになったり、元気でないときに元気をくれたりする今の自分を作ってくれた大切な存在である。そして現在福祉を学ぶ上で障害分野にも興味があり、特に知的障害のある児童と書籍の関係に注目したいと考え、このテーマを設定した。

知的障害とは知的な学習や抽象的な思考、環境適応が苦手であり、言語発達の遅れに困難があり、その中でも学習面に特徴に注目し、「具体的な事物や活動は理解できるけれど抽象的な概念の理解や思考が苦手」ではあるが、書籍という抽象的な道具を活用することにチャレンジしてみたい。そして、日常生活における各種技能を獲得することを目指し、以下の困難さを克服することができれば自立につながると考える。

- ① 「新しい環境への適応が難しく、状況に応じた適切な行動が苦手」であり、対人関係や集団行動での困難がある
- ② 「習得している言語の数が少ない、幼児語を使う等、言語の発達の遅れ」であり、対人関係や学習面での周囲との差で困難がある。

このような困難さを、書籍を活用することで学習意欲を持ち続けながら日常生活に関する技能を高めることができれば、社会生活を円滑に送ることにつながり、自立に向かうと考える。そしてその他の特徴として、視覚あるいは聴覚の優位さが顕著に見られることがある。学習面においても、優位な点を活かすことで知識はより定着しやすくなるといえる。これらを踏まえ、本人の興味や関心を示すものは何であるのかを知り、活動を促すこと、本人の発達年齢に合った支援をし、本人にできる現実的な生活に結びつく活動を通して言葉を習得することや、抽象的な思考になれることを、マルチメディア的な広義の書籍の活用によって、日常生活の技能を高めていくことが可能と考えた。そのため一般的な本ではないが抽象的である書籍を通して日常生活の技能を高めたいと考えた。

障害者のための図書としては「マルチメディア DAISY」という物がある。「マルチ

メディア DAISY」とはパソコンのソフトを使用し、音声にテキスト・画像をシンクロさせることができ、音声のスピードや文字の大きさ、背景とのコントラストの変更や、読んでいる部分が光る等機能が多くある。この機能は文字を目で追うことが苦手である人も、ハイライト機能で読んでいる部分を追ってくれることで読みやすくなる、内容を理解することに時間がかかる人でも速度変更の機能により、自分のペースで本を読むことができる。そのため「マルチメディア DAISY」は誰でも簡単に読むことができる図書である。この「マルチメディア DAISY」を実際に学校の図書館に導入した鳥取大学附属特別支援学校では、各学級の発達年齢や興味関心ごとに「マルチメディア DAISY」を使用してもらおうと、小学部では主体的に読み聞かせを楽しんでくれるようになり、中学部では、一文字ずつしか文字を読めなかった生徒が連続した文字が読めるようになり、高学部ではほとんどの生徒が難しい内容の物語を理解することができるようになったという。このことから本人の興味や関心、ペースや苦手に合わせて、機能を変えることで機能障害だけでなく、発達障害や知的障害があっても本が読みやすくなると考えた。

ただ絵と字だけが描かれた絵本だけは抽象的過ぎるため、本人にとって現実の出来事と結びけることは難しいのではないかと感じた。そこで私は、例えばファミレスで靴を脱いでしまう児童がいるとし、靴や食事の絵だけではなく、お店のマークや外観の写真を出し入れできるポケットを付けることで抽象的ではあるが、現実と結び付けやすくなるのではないかと考えた。そして、めくるたびに音が出力される機能を付けることで、視覚だけでなく聴覚にも訴えかけることができ、内容が理解しやすくなると考えた。²⁾

2. 実験の概要

私は個人の「楽しい」という気持ちや「気になる」という気持ちを詰め込んだ、本人の興味関心を詰め込みながら、苦手を克服できるような本を作ってしまうと、楽しみながら本人の学習意欲を継続させることができるのではないかと考えた。そのため私は視覚と聴覚を使い、日常生活に役立てることのできる本を作りたいと考えた。書

籍で日常生活の技能向上を図ることは可能であるのか、できなかったとすればなに何
が足りないのか、どのように改善すべきなのか考え、改善点を踏まえ、絵本を作っ
てみたいと思う。絵本の内容としてはたとえば、騒いではいけない状況で大きな声が出
てしまう人に対して、その人が何に興味を示しているのか、どんなことに関心をもっ
ているのか知り、好きなキャラクターがいるならそのキャラクターが出てくる絵本、
電車が好きなら電車が出てくる絵本にし、どのような場面でどのような行動をするの
か、本人にもわかりやすい表現で、本をめくるたびに本文を読み上げる絵本にしたい
と考えている。そして現実のものと結び付けやすいよう、写真を利用し、普段本人が
利用している物や利用している場所の写真を場合によって使い分けることができよ
う、写真を入れ替えられるようにしておく。

3. 目的

私は相談援助実習を障害者の生活介護施設で行った際、障害と地域をつなげる支援
を学んだ。障害と地域をつなげるということは障害の有無に関わらず暮らしやすい地
域、だれでも暮らしやすい環境を整えることである。地域とは事業所の周りの環境、
利用者の家族の周辺の環境、外出先での環境を整えることである。現在でも障害の施
設ができる際に地域の方から苦情がくることがあるという。怖いというイメージがあ
るのだと聞いた。しかし、外出が大好きな人はたくさんいるし、散歩が大好きな人も
たくさんいる。しかし、外出の際、他の人の家の畑に入ってしまう、物を移動させて
しまう人がいた場合、その家の方は障害についてマイナスなイメージを持ってしま
う可能性がある。そこで支援者としてできることはその後のケアが大切であることを学
んだ。もし、苦情をいただいた場合、その場できちんと謝ること、そして、後日また
謝りに伺うこと、迷惑をかけたかもしれないという場合も同様にすること等、丁寧な
アフターケアを行うことで、障害の有無にかかわらず暮らしやすい地域づくりにつな
がることであると学んだ。

しかし、支援者や家族がいない状況になった際、人の家の畑に入ってしまう、物を
移動させてしまうことは社会生活を送るうえで他の人の迷惑になってしまうのだとい
うことを分かりやすく伝えるために、視覚と聴覚に訴えかけるものがあればと思い、
この研究を行いたいと考えた。

4. 調査方法

① 「実験手順」

- (1) 絵本に必要な機能を決める
- (2) ページをめくると音声が出力される絵本を試作する
- (3) 健常者によるページをめくる動作により、正確に機能するかを確認する
- (4) 目的が叶うまで、施策を繰り返す。

② 絵本作りの試作

- ① 発泡スチロール板(5 mm厚)を長方形に切り、三枚にする。
- ② 一枚目はそのままにし、二枚目はめくることのできるよう、図1のように端を1 cm程度縦に切り、テープを張る。

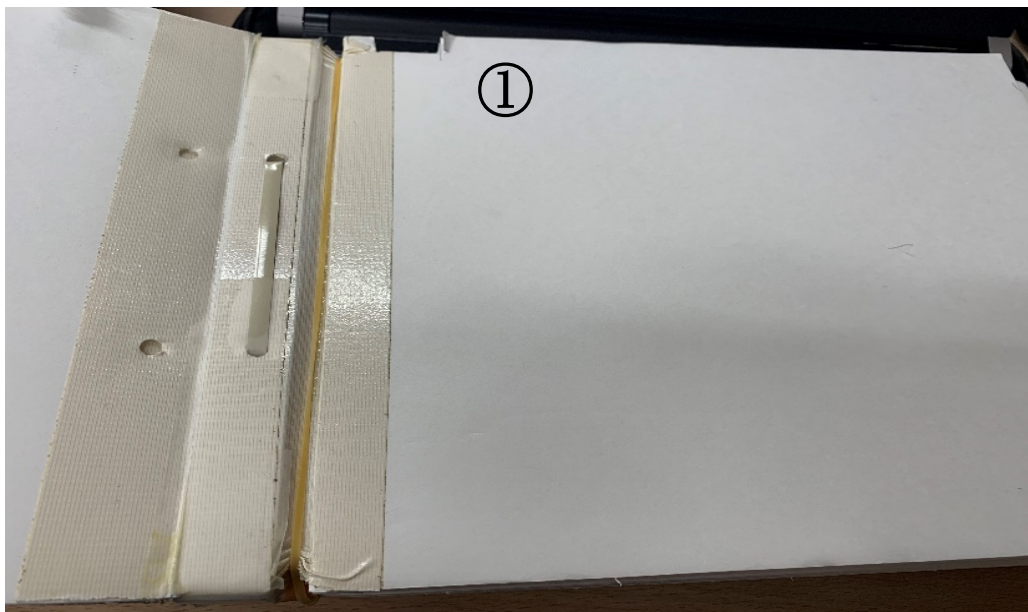


図 1 【書籍を開いた図】

- ③ 三枚目は図2のように、再生のスイッチの厚さに合わせ、発泡スチロールを三枚重ね、スイッチの厚さ分を切り取る。
- ④ 三枚を重ね、テープでまとめる。作ったすべてをまとめ、図1のように穴あけパンチで穴をあけ、まとめる。
- ⑤ 開いたときにスイッチがすべて離れてしまわないように輪ゴムで圧をかける。

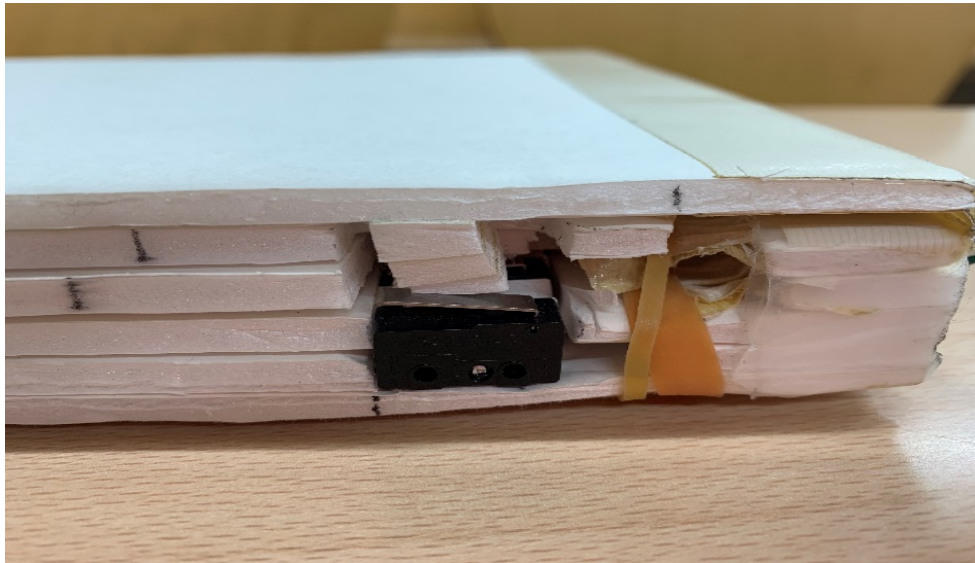


図 2 【スイッチの厚さ】

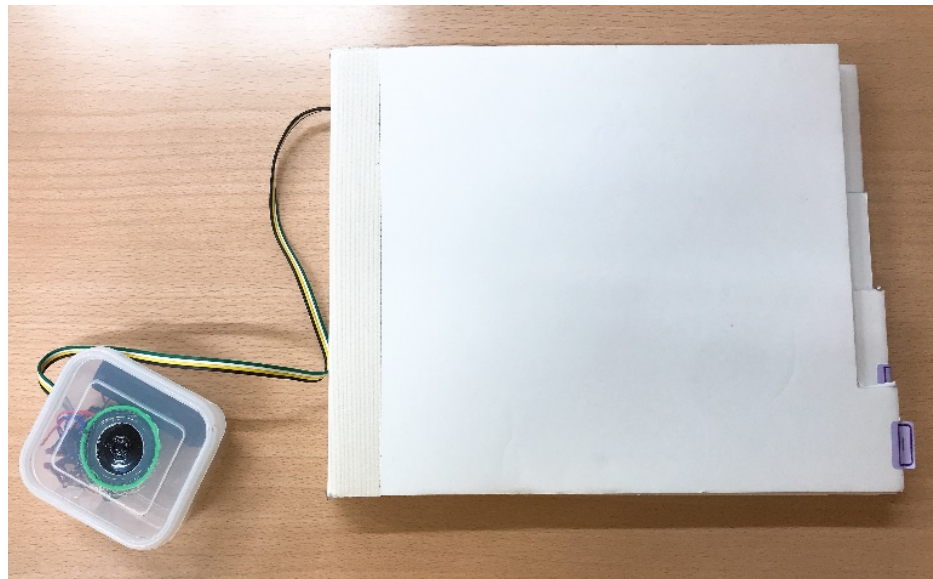


図 3 【書籍の全体図】

- I) ページをめくると音声が出力されるという機能を有する絵本をどのような構造にすれば良いのかを試作により実験する。
- II) 機能の確認のみを目的とするため工作しやすい材料で試作する。
- III) 手軽に工作できる発泡スチロール版を利用して、構造を試作した。

IV) 構造的には目的を達成することができたが、軽量であり、スイッチのばねでページが浮き上がってしまい、スイッチがONにならないことが判明した。

5. 考察・課題

めくるたびに読み上げる機能が付いた絵本づくりを進めていき、まだ試作品の段階ではあるが、たくさんの改善点が見つかった。

まず、絵本には利用者本人の苦手に関連する絵を付けようと考えていたが、知的障害は知的な学習や抽象的な思考が苦手であるということから、絵という抽象的なものではなく、現実と結びつきやすい物を取り入れたほうが良いのではないかと考え、写真を使用することとなった。写真も貼り付けてしまうのではなく、場合によって入れ替えが可能な物にすることで臨機応変に対応できるようになると考えた。

そして、絵本本体にも課題が残っている。発泡スチロールではページ1枚が軽すぎてしまい、1枚開くと残りのページが浮いてしまい、一気に音が鳴ってしまった。これを防ぐため、①発泡スチロールより重い素材で絵本を作る②スイッチを軽い力で押せるものに変えることを考えた。そのため、次は①は、ベニヤ板に変更し、②も別のスイッチに変えてみたいと考えている。

今後は抽象的であること、素材が軽量すぎること、スイッチのばねが強い等の課題を改善したうえで新たな絵本を利用し、実際に障害児を含めた被験者による利用実験について、その実施の検討を行いたい。

6. 参考文献

- 1) トーティス・ウーリアセーター著 藤田雅子・乾侑美子訳 (1989. 3)
「本は友だち ―障害をもつ子どもと本の出会いのために」 株式会社偕成社

- 2) コニー＝マグヌッソン・ヒルド＝ロレンツィ著 橋本善郎訳 (2002. 9. 25)
「機能障害をもつ人たちの余暇 スウェーデンのレクリエーション」
株式会社明石書店

- 3) 鳥取大学附属特別支援学校 児島陽子 入川加代子
「知的支援学校における実践事例 知的な遅れがある子どもたちにも読書の楽しさを！ ―学校図書館オリエンテーションでの活用を通して」
わいわい文庫2 066～073 頁
http://www.itc-zaidan.or.jp/pdf/ebook/waiwai_katsuyou2_066_073.pdf
[2018. 5. 27](#)

- 4) Copyright(C)2006 日本図書館協会障害者サービス委員会
「「マルチメディアDAISY (デイジー)」や「やさしく読める本」を知っていますか」
<https://www.jla.or.jp/portals/0/html/lsh/redheel.html> 2018. 5. 27

7. 謝辞

最後に、この研究をゼミナール論文として形にすることができたのも、実験を温かく見守り、適切な指導をしていただいた伊藤英一教授のおかげです。心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞に代えさせていただきます。

長野大学社会福祉学部
伊藤専門ゼミナール報告書

平成 31 年 3 月発行

本件に対する問い合わせ先：

長野大学社会福祉学部社会福祉学科
伊藤英一(教授)

<http://www2.nagano.ac.jp/ito/>

長野県上田市下之郷 658-1

0268-39-0001